

東西と一ざい

MITが開発した 「遮音カーテン」

滋賀県・小野 隆浩



新学期が始まって間もないころ、学内LANを通じ他学科の研究室から「これは音響界だけではなく、建築や交通の分野でも大きな発明だ！」と飛び込んできたニュースがある。アメリカのマサチューセッツ工科大学(MIT)に所属するヨエル・フィンク氏ら研究チームは、髪の毛ほどの薄さの布地で音を最大65dB~70dBほど軽減できる防音カーテンを開発し、その研究の詳細を2024年4月1日付の科学誌『Advanced Materials』に掲載したということである。この布地には、極小の圧電素子が

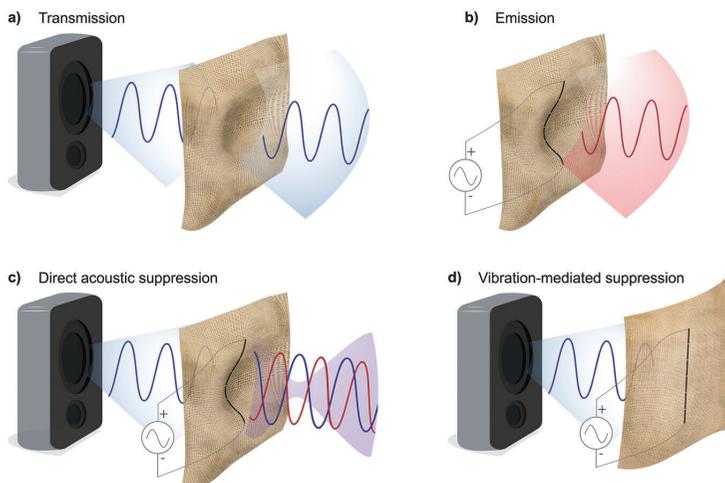


図1

織り込まれており、それをコントロールすることで遮音を図る仕組みとの事である。発表された論文にも「シルクのような」と表記があり、シルクスカーフのような薄さとしなやかさを持つ布地らしい。

彼らはその特殊な布地によるカーテンを用いて、「逆位相による音の打ち消し」や「布地の振動を抑えて音を反射する」ことが可能だと述べている。図1のa)にあるように、空気振動の粗密波である「音」は、通常は布地ぐらいの遮蔽物は問題なく透過してし

まう。そこでb)にあるように圧電素子を振動させ布地自体を揺らす。その揺れをコントロールすることでc)に表記されているように、発生した「音」と逆相の布地の揺れを生じさせて「遮音」を図るといふ、従来からよく知られている「ノイズキャンセリング」の技術を使った方法である。しかし、同論文によると、この方法は一定の持続した特定帯域の周波数の音(モーターやコンプレッサー、電車や車の走行音)等には非常に効果的だが、ランダムに発生する「広

引っ越しの話
その2

岐阜県・熊野 大輔

帯域の音」には効果が薄いと
している。そこで彼らはd)
という全く新しい方式を生み
出した。それは圧電素子をコ
ントロールし、布地の揺れを
「物理的に静止」させて「音の
キャンセル」ではなく「遮音」
を図るという方式である。こ
ちらの方が遮音性能は上との
ことで、c)方式とd)方式を
組み合わせることで65dBほど
の遮音性能を持たすことがで
きるとの事である。

実はびわ湖ホールの音響調
整室にも、機器のファンノイ
ズ等のマシンノイズを減衰さ
せる「遮音カーテン」がある(写
真1)。これはPVCシートや
コットンの布地を何層にも重
ねたもので、空港の事務所や
会議室にも使われている物だ
が、カーテンと呼ぶよりは
「板」と呼んだほうが良いぐら
いに、布地としてのしなやか
さは全く無い(写真2)。遮音
性能はそれなりにあり、音響
調整室の窓を開けても客席に
マシンノイズが漏れることは
なく重宝しているが、設置の
時に通常のカーテンレールや
軽量鉄骨ではカーテンの荷重
が持たないため、特別に追加
の梁を入れ専用のカーテン
レールを特注した経験がある。

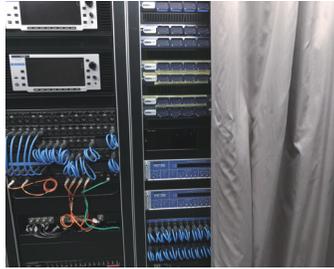


写真1



写真2

このMITで開発された遮音
カーテンそのものや、音のセ
ンサー部分および圧電素子の
ドライバー部分の詳細はわか
らないが、もし超小型の物が
実用化されれば、本当に音響
界だけではなく、インドア・
アウトドア問わずに、様々な
シーンで使用したい場所や方
法は無限に広がるような気が
する。蛇足だが、論文を読み
ながら高校生の時に読んだ
SF界の巨匠、小松左京氏の
小説で、秘密の保持のために
実験ラボを仕切る同様の効果
がある薄い布について書かれ
た記述を思い出した。いずれ
にしても今後の実用化・製品
化を期待したい。

(大阪芸術大学 びわ湖ホール)



誰も覚えてはいないでしょ
うが、以前にこのコーナーで、
これまでに引っ越しを15回し
てきたことを書きました。そ
してこのたび16回目の引っ越
しを行うことになりました。
今の家には5年住んだことにな
り、私としては長い方です。
息子が中学校に上がったこと
を機に、部屋数の多いアパー
トに引っ越すこととなった次
第です。ありがたいことに私
も8年ぶりに自室をあてがわ
れることになりました。妻に
深く感謝します。このアパー
トは半年前にも狙っていたの
ですが、なかなか人気の物件
で、我々が本腰を入れる前に
他の方が契約してしまいました。
家賃と間取り、そしてペッ
ト可であることを考慮する
と、他に選択肢が無いくらい
の好条件で、次に空きが出る
のはいつのことやらと思っ

いたのですが、妻が毎日賃貸サイトをチェックしてくれていたおかげで、空きが出た直後に申し込みをすることができました。

引越しにおいては、物だけでなく各種インフラの引越し手続きも忘れてはなりません。ガスに関しては、引越すたびに都市ガス・LP・ガス無し(IH)と変わるため、多少面倒ですが、悩むほどではありません。電気はネットで手続きできるし、水道は電話1本です。そういえば先日、実家の浄化水槽の清掃について業者から電話があり、「……実家、下水道じゃなかったんだ……」と、輪ゴムで腕をパチンとされたくらいの小さな衝撃を受けました。このことで、浄化水槽と汲み取り式が違うことも知りました。

鬼門となるのがインターネット回線の引越しです。私の場合、8年間同じ会社と契約しているのに、スムーズにいった経験がありません。なぜ我が家の条件に合う手続きがネット上でできないのか、なので電話をかけてみたらなぜ10分以上繋がらないのか、なぜ引越すたびにレンタル

のWi-Fiルーターを交換しなければならないのか。なぜ頼まれてもいないのにNHKの引越し手続きをしようとするのか、そしてなぜ手続き後にウォーターサーバー無料レンタルの営業をかけられるのか。それは私に学習能力がなく、カモにされやすい体質だからではないでしょうか。

妻によれば、私と息子は「何も考えずに引出しや箱に物をしまい込むため、いつまでたっても片付かない」とのことです。ためしにそこいらの引出しを開けてみると、「いつか使うかも」が混沌となっていました。どう考えても今の私にTRSの8対ケーブルを使う機会があるとは思えません。それも2本。そして大量のFireWire400ケーブル。とりあえず、引出しの付いた家具を処分することにしました。残る敵は折り畳み式のプラケースです。

この文章が掲載される頃には引越しが完了している予定です。各々どのように自室を作り上げていくか、そして今回自室を奪われた猫ほどの部屋を根城にするのか。(次回に続くかも)

文化省?文化庁? はたして……

東京都・齋藤 美佐男



ルーマニアの首都ブカレストのアンリ・コアンダ国際空港に着いたのは現地時間で20時を過ぎていました。東京からルーマニアまでの直行便がないためエールフランス航空を利用しパリを経由して漸く到着です。ここからさらに北へ290キロほど離れたバカウ県に有るバカウ市までフェスティバルが手配した乗用車で向かいます。所要時間は約4時間。空港で待つこと3時間やっと迎いの車が到着しました。迎いの車の台数が少なく他の出演者の出迎えが有り、こちらに来るのに時間が掛かったようです。

2012年4月バカウ市立の劇場TEATRUL MUNICIPAL BACOVIAで行われるガラスター国際演劇祭ワンマンショウ・フェスティバルに参加するため乗り換えを含め20

時間をかけてやってきました。今回は声優の堀絢子さんの一人芝居『朝ちゃん』でこのフェスティバルに臨みます。作家山本真理子さんの「広島母たち」が原作で堀さん自身が脚色し、語り手を含め5役を一人で演じている作品です。1945年8月6日広島ではアメリカ軍によって投下された原子爆弾により大勢の犠牲者が出ました。この物語は大けがを負い瀕死の朝ちゃんを、翌8月7日に友人の秋子が偶然見つけるところから始まります。あの日の広島の現実を伝えたいという思いから、父親を原爆で失った堀絢子さんが、是非参加したいとの思いでこの地にやってきました。

やっと迎えに来た車に乗り込み、まずは腹ごしらえで発酵麦を使用したルーマニアのスープ料理「チオルバ」を求めて街道沿いのレストランに立ち寄りました。もともとは家庭料理なのでそれぞれの店により味が違うそうです。日本で言えば自家製みそで作るみそ汁の様なものだそうです。久しぶりに頂くチオルバはとてもおいしく体が温まります。

レストランを出発し、やっと宿に着いてベッドに入れると思った矢先、今度は運転手

が立ち寄りたところが有るので付き合ってくれ、と言ってきました。車は彼に任せてあるのでしょうかなく付き合いがあります。しばらく走り暗い田舎の一軒の家の前に到着しました。そこは運転手さんの実家だそうです。母親が日本人を見たことがないので連れて来たそうです。我々がお母さんにとっては日本人の代表となるのでしょうか。眠たい目をしっかり見開き日本人として恥ずかしくない様にきちんとご挨拶したのは言うまでもありません。お母さんからはフルーツを原料とした手作りの蒸留酒「ツイカ」を頂きました。遅い時間だったのですが息子からの連絡で、お土産まで用意して待っていてくれたようです。

翌日は劇場の一室を借り芝居の稽古です。本番は劇場の機材を借りて行うことにしています。機材は航空運賃の事を考えPC1台とインターフェース1台を日本から持ち込みました。ミキサー・アンプ・スピーカーは劇場の常設の物を工夫して使用します。照明さんは必要な色だけを持ち込んでいました。この日はミキサーなどの機材が無い

めPCとインターフェイスを使いパワードスピーカーを1台調達してもらい稽古を行いました。

4月8日本番当日。同じ舞台を使った3本目として『朝ちゃん』を上演しました。実は4本目として演劇集団風の辻由美子さんが参加する予定でしたが、都合がつかず公演は有りませんでした。辻さんはこの演劇祭に2006年に参加し『ピカソの女たち～オルガ』作ブライアン・マキャベラ、演出ペトロ・ヴトカレウ(モルドバ共和国)において最優秀大賞を受賞しています。

翌9日が演劇祭最後の日です。そのオオトリの公演は当時のルーマニアの文化大臣イオン・カラミトルが舞台上がりチェロをバックに朗々たる一人語りを演じました。もともとは海外の映画にも出演している俳優で、ルーマニアでは有名な方だそうです。日本だと地方の市民会館主催の国際演劇祭に文化庁長官がトリで出演するようなものです。日本ではあり得ますか？ 京都から出てくるんでしょうか？ 日本のように文部科学省に飲み込まれている文化庁では無いのです。こちらは文

化省の大臣です。

ルーマニアには私の聞き及んだところにおいては2つか3つの演劇に特化した国立劇場が有ります。一つがブカレスト。そして国際演劇祭が有るシビウ。もう1か所は勘違いかもしれませんが、これも国際演劇祭を行っているティミショアラです。その他の都市も各都市が市立の劇場を持っていて、そのそれぞれの劇場が劇団を運営しています。このバカウの劇場も劇団を持ち、そこに所属する人達はみな公務員です。芸術監督・演出・俳優・舞台監督・舞台美術・照明・音響・衣装・掃除・大道具の叩き・警備・衣装の洗濯・装置の色塗り等多くの方が働いています。日本の舞台人で公務員は何人いますか？

昨2023年ルーマニアとウクライナに囲まれた国モルドバ共和国を訪れました。首都キシナウで行われた国際演劇祭BiTeilに参加するためです。参加国はモルドバ・ルーマニア・戦時下のウクライナ・イタリア・スペイン・ポーランド・ジョージア、アジアからは韓国・中国、そして日本からは展示参加一つを含めて3団体が参加しています。私は劇団

1980の『楡山節考』で参加しました。この国際演劇祭主催はEUGENE IONESCO劇場で、もちろん国立劇場であり劇団も有します。その主催者は劇場と劇団を運営している先ほど辻由美子さんの一人芝居を演出したペトロ・ヴトカレウ氏です。

モルドバはヨーロッパ最貧国の一つと言われてきました。その国が国際演劇祭を開催しています。確かに紙幣はヨーロッパでは珍しく何年も前のままのデザインで紙質も決して良いとは言えません。数年前に行ったときに余った紙幣がそのまま使えました。ユーロやドルに対する貨幣価値もあまり変化が無いのかもしれませんが。演劇祭のパンフレットの1ページ目はモルドバ女性大統領のマイア・サンデュ氏が写真入りで挨拶文を寄せています。次のページが文化大臣のセルジウ・プロダン氏の写真と挨拶。次に主催のペトロ・ヴトカレウ氏の写真と挨拶です。その3氏の写真の大きさと挨拶文のスペースは同一です。

堀絢子さんは残念ながら賞には至りませんでした。ですが遠い異国から来たからで

しょうか、あと一步で賞に届きそうだったのでしょうかは解りませんが、主催者がモルドバ地方(ルーマニアにもモルドバが有ります。これにはソ連が深くかかわっている様です。)の世界遺産の教会に運転手付きで案内をしてくれました。向かっている途中でレストランに立ち寄りこれもルーマニア郷土料理の一つでキャベツの漬物を使ったキャベツロール料理「サルマーレ」を頂きました。「チヨルバ」同様胃の腑にしみて体が温まりました。

私は、2010年にもこのワンマンショー・フェスティバルに参加しています。その時は劇団1980の柴田義之さんが藤田傳演出『こい』で最優秀男優賞を受賞しています。

(東京演劇音響研究所)

3 作品に関わって

東京都・坂口 野花



今年も早い時期から30℃を越える暑さですね。今夏も無

事に越せるよう願う今日この頃。

最近の仕事としては桐朋学園短期大学演劇科のATEC (Asia Theatre Education Centre)参加で北京へ、そして試演会&凱旋公演(大谷賢治郎 演出)がある。ATECは『ヤギと少年、洞窟の中へ』という池澤夏樹、黒田征太郎原作の絵本から、ディバイジングという、稽古過程で作品創造を行うという手法で作った舞台。出演する学生と演出家は沖縄に行き資料館などへ行って視察してきたそう。学生は皆、音感が良く歌が上手い。台詞を喋っていない時はサークルソングというアカペラの即興性のある歌を歌っているという、難易度が高い事をやってのけるし、沖縄三線や歌が初めてという子達も、短期間で演奏をこなしている。ヤギが登場してくるのですが、ダンボールで出来たヤギのパーツをそれぞれが持って構成されている、それが本当に生きたヤギが意思を持って行動している様に見える。沖縄戦で犠牲になったひめゆり学徒隊の話がメインですが、演じている学生たちがちょうどそのひめゆり学徒隊の年代と被っているのと、現

地で体感したものが表現されて、リアルにその悲惨さが伝わってきました。

試演会1本目は井上ひさし作『父と暮らせば』でした。最近はこちらで上演されている演目だが、こまつ座での初演に当時仕込み要員として関わっていた事がある。当時、深川定次がプランナーで、井上さんの台本はギリギリになり初日が遅れる事が多かったのが、その時は予定通り初日に間に合ってしまったという。追加の台本は直筆のものが事務所のFAXに送られてくる。初演はすまけいさんと梅沢昌代さん。お二人とも台詞の覚えが異常に早かったらしい。照明のプランナーさんが慌てて仕込み要員を発注していた。音楽も宇野誠一郎さんが慌てて録音していたと聞く。今回の本番に、当時こまつ座の制作部にいらした方がみえていて、あの当時は上演時間が1時間20分位だったと聞く。今回は1時間10分くらい。喋りが速くなっているのは時代なのか。雨漏りがあちこちで起こり、鍋や茶碗を次々に置いていくシーンがあるのだが、当時は演出部が点滴のセットを利用して、落ちるスピードを調整しながらリ

アルに雫を落としている生音と仕込スピーカーからの雫音をMIXしていた。

試演会、もう一本は『その頬、熱線に焼かれ』。これも広島原爆でケロイドを負った年頃の女子たちが、アメリカで治療を受けるが、一人は治療中に亡くなってしまふところから始まる。初演はON7 (オンナナ)といういろんな新劇系劇団から集まって出来た劇団の為に書き下ろされた台本で、それぞれの登場人物が生かされている。短期間に劇的な変化を見せる学生が居たり、芝居中に涙が止まらなくなってしまった学生にそっとハンカチを渡すという事が自然に出来る学生が居たり、いいものを沢山見せて貰いました。

(東京演劇音響研究所)

パリは燃えてます？

東京都・鈴木 三枝子



ちょうどパリオリンピック

が開幕したころだろう。

どうですか？盛り上がって
ますか？

私も人並みにスポーツには
興味がある。ワクワクするし、
熱狂することもある。でも絶
対にリアルタイムでは見な
い。絶対に、見ない。なぜっ
て、私が応援していると負け
るから。

少女時代はそんなことな
かった。オリンピックが大好き
で、夏季も冬季も夢中にな
って応援していた。現長野
市長の萩原健司氏が、ノル
ディック複合競技で2大会連
続金メダルを取った頃、1990
年前半は私のスポーツ観戦全
盛期だったと思う。伊藤みど
りさんもフィギュアでトリプ
ルアクセルを決めて銀メダル
取ったし、岩崎恭子ちゃんは
14歳で競泳金メダル、柔道の
古賀さんは乱取り中のケガが
ありながら、その乱取り相手
だった吉田選手とともに金メ
ダル。ああ、感動にあふれて
いた1992年(この頃、冬季も
夏季も同じ年にやっていたの
を思い出しました)。

国を超えて陸上10種競技の
ダン・オブライエンも大好き
だった。1992年バルセロナオ
リンピックで金メダル確実と

言われていたのに、なんとア
メリカの国内予選、棒高跳び
で記録が出せず、オリンピッ
ク出場がかなわなかった。そ
れを新聞で読んだ時の気持
ちは今でも忘れない。まさか、
まさかあのダンが。私はほと
んど泣いていた。しかし4年
後のアトランタオリンピック
では見事に出場。そして、金
メダル。万感の思いだった。
ますますスポーツの持つ物語
の力に魅せられていた。

けれど、どうやらそのアト
ランタオリンピック頃から、
私の観戦運は雲行きが怪しく
なってきたようだ。ヤワ
ラちゃんこと田村(当時)亮子
選手、20歳で金メダル大本命
だったのに、無名の北朝鮮の
ケー・スンヒ選手に決勝で負
けてしまった。私はテレビの
前で呆然としていた。え？そ
んなことある？

その辺りから、坂道を転げ
落ちるように、「私が見ると
負ける」ジンクスが成立して
いく。もちろん自分でも偶然
なのは分かっている。私ごと
きが観戦したからとて、勝敗
に関係がある、などと考える
方が選手の皆さんに失礼とい
うものであろう。

でも、この悩み、意外に多
くの人が抱えているらしい。
ネットで

「試合 見ると負ける」

「スポーツ 見ると負ける」な
どと検索すると、結構な量の
記事が出てくる。Yahoo知恵
袋でも、同じような悩みを持
つ人が定期的に質問を上げて
いる。面白いところでは、「将
棋の藤井聡太八冠を応援した
いけど、私がテレビで応援す
ると必ず負ける」という投稿
が、2023年10月26日に上が
っていた。これは八冠達成直後
のことで、確かに破竹の勢い
の藤井聡太さんが負けるの
を見る方が珍しいだろうし、も
し見るたびに負けるのであれば、
自分のせいか？と思って
しまう気持ちは、察して余り
あるものだ。

私も二度とリアルタイム観
戦はしないと心に誓った試合
がある。2012年ロンドンオリ
ンピック。その頃男子体操の
内村選手は世界の絶対王者、
キングだった。「この人の競
技なら、いくら何でも私のジ
ンクスなど吹き飛ぶだろ
う。」そんな気持ちで、種目別
予選を固唾をのんで応援して
いた。そして、鉄棒で…落下
したのだ、キング内村が。慌

ててテレビを消した。そして自分の甘さを呪って、心の底から謝罪し、誓った。もう、リアルタイムスポーツ観戦はしません。

それからは駅伝や、高校野球や、女子プロレスのスターダムなど、私にとって特定の個人やチームを応援するわけではない、純粋に見て楽しむためのスポーツだけをリアルタイム視聴している。本当は去年のWBCだって、めちゃくちゃ見たかった。というか、ほとんどの試合を「録画」で見た。「録画」でみんなより半日くらいずつ遅れて味わった。結果を知りながら試合を見ることほど不毛なものもないが、それでも十分楽しんだ。私が見て負けたら、死んでも死にきれない。それに比べたら、リアルタイムで見られないことなどたいしたことではない。そういう応援の仕方もあるのだ。

ただ一度だけ誓いを破った試合がある。ソチオリンピックの女子フィギュアフリーの浅田真央ちゃんの演技。前日のショートプログラムで、真央ちゃんはジャンプでミスをして16位だった。私は当然真央ちゃんのために視聴は控え

ていたんで、その結果をニュースで知った。真央ちゃんがジュニアで脚光を浴びてから、みんなと同じようにずっとずっと見続けていた。キムヨナさんとの戦いも、涙しながら応援し続けていた(録画で)。その真央ちゃんが、もう金メダル絶望の16位発進。年齢的にも、もう最後のオリンピックだろう。

優勝が懸かっている試合ならば、見てもいいのではないかと？真央ちゃんの姿をどうしても見届たい。ニュースを知ってから数時間、悩みに悩んで、午前3時。私はテレビの前にいた。正座をして真央ちゃんのラストオリンピックを見届けた。

夢のように美しく、見事な、すべてが完成された演技だった。涙しか出てこなかった。今でも脳裏に浮かべることができるほどに。

今のところ、あれが最後のリアルタイム観戦となっている。パリオリンピックも、自分では見ないし、テレビのある中華料理屋さんなどには絶対に近づかない覚悟でいる。でも心では全力で応援し続けようと思う。世の中にはそう

いう応援の仕方もあるのだ。
(Ivy Cricket)

2024年ミュージカルの旅公演

神奈川県・千葉 治朗



みなさまおはようございます。劇団四季の千葉治朗です。

今日は7月3日で、いつものことですが原稿を駆け込みで書いています。

というのも現在音響を担当している『ジーザスクライストスーパースター』の全国公演が6月29日座間からスタートして今日が2回目、パルテノン多摩での公演を無事終え帰宅したところなのです。しばらくは東京近郊の劇場で公演をして、その後11月末まで日本全国をまわります。

この『ジーザスクライストスーパースター』は劇団四季に、そして僕にとっても大切な作品です。というのも演出家の浅利さんが我が子のように愛し、魂を注がれて創

り上げた作品だからです。前回のジーザスの全国公演は2018年の2月、3月に期間限定でやりました。その時も僕と妻の千葉真理子が音響を担当していました。今でも忘れませんが、浅利さんがご逝去されたのは2018年7月13日(劇団四季創立記念日の前日)なのですが、なんと全国公演中のカルッツかわさき(川崎)公演を、辛いお体をおして観にきてくれたのです。終演後、楽屋にも来てくださって、俳優とスタッフ全員に声をかけてくれました。そして僕にも小さな声で「音響よくやっている、たのんだぞ」と言葉をかけてくださり、握手をしてくれました。それが浅利さんと最後の交流でした。今でも思い出すと涙が出てきます。

話しがそれてしまいましたが、2024年の旅公演は色々大変になってきました。特に安全面ですが、搬入仕込み、照明のシュートが終わるまではスタッフ、アルバイト全員ヘルメット、安全靴、長袖、長ズボンを着用しなければなりません。バラシ、積み込みも然りです。これからどんどん気温が上がってきますが、長袖長ズボンは暑く辛いです。最近は空調服があり、舞台、

照明スタッフはみんな着用しています。かなり強力に冷えるみたいですが(冷えすぎてお腹を下す人もいますみたいです)、ファンの音が結構うるさいです。だからスタッフは、ファンがついている機材のようです。安全靴も仕込みで長時間履いていると重たいので、足が疲れてもつれそうになります。だいぶ慣れましたが…。今の時代、足袋雪駄はアウトです。アルバイトさんたちへ指示を出す、言葉使いも注意しなければなりません。ハラスメントになることもあるからです。まあこれはプロの世界でも後輩に対する言葉使いは注意しなければなりません。それから2024年問題。ドライバーの労働時間が制限され、今まではドライバーさんも搬入した後、舞台の仕込みなどを手伝ってくれていましたが、それが出来なくなりました。テールゲートリフトの安全確認もやらなければなりません。プラットホームのある搬入口はいいのですが、地降ろしでテールゲートリフトを昇降させる時は大変です。音響機材でキャスター付きのものは、ブレーキがついていなければ、昇降時にゴム製のストッパーをキャスター

にかませなければなりません。また昇降中の機材を手で押さえることは禁止されています。地降ろしの時はかなり時間がかかります。

2024年のツアーは安全、コミュニケーション、そしてクリエイティブ面をバランスよく対応していかなければいけません。昭和時代のスタッフ(僕です)のように職人気質でウリヤウリヤやっている場合はありません。時代に沿って進化していかなければ化石になってしまいます。そんなことを最近悶々と考えてしまい、ちょっとうつ状態です。でもいつの時代もバランスが大事ですね。

音響の仕事もバランスです。ではまた。

(劇団四季音響部)

大切なのは冷静さ、
思い込みはいけません

神奈川県・千葉 真理子



皆さま、おはようございます。劇団四季の千葉真理子で

す。梅雨に入っているのです。じめじめ、洗濯物も溜まりがちな今日このごろ、皆さまにはいかがお過ごしでしょうか？

早いもので、1年も半分が過ぎてしまいました。世間は円安、物価高、オーバーツーリズム、富士山とコンビニ、猛暑、ゲリラ豪雨と(もっと色々なことがあると思いますが、自分の身近な関心事から考えると・・・)、慌ただしい感じですが、私も相変わらずバタバタしています。

今年初めから担当していた演目ですが、次の人への引き継ぎが終わり、やっと解放されたというのも束の間、そのまま次の演目の稽古場に入っています。あまりにも作品の雰囲気違います。激しくシリアスなロックミュージカルから、ほんわかした可愛らしい子供ミュージカルの世界です。色で言ったら白黒のモノトーンから派手なパステルカラーかしら。

その白黒モノトーンのミュージカルでの出来事を、ちょっとお話しします。

およそ2ヶ月のステイ公演から乗り打ちの全国公演へと旅立ちます。乗り打ちといっても、道具、装置、衣装など、

何も変わりません。音響としても旅公演を加味してシステムを組んできました。はっきりいって「オチャノコサイサイ」と鼻歌交じりの軽い気持ちで会館入り、さらに、引き継いで渡してしまったので、ほんのお手伝いのつもり的一段とかるーい参加です。(うそです、こんな軽い気持ちで臨んでいません、真摯な姿勢です)

搬入が始まり客席に機材を運んで行きます。バイトくん、宜しく、頑張っ、頼りにしているよ。そして、しこしこケーブルを繋いでいきます。話はそれますが、昔に比べてなんとケーブルが少ないこと。ワイヤレスマイクの本数分パッチケーブルを差し込んでいた頃が懐かしいです。そして大体の仕込みが終わり電源をいれます。するとSurfaceに光が灯り、つぎつぎとフェーダーが動き、液晶の画面もどんどん変わっていきます。すると、あれあれ、SurfaceとDSPがリンクしません。なんか変です！大変です！！他のDeviceも出てきません。やばいです。ひじょーにやばいです。

「どうしたんだ、いつも愛情もって接しているじゃないか？！何があったんだ、何が

不満なのか？」

最初に疑ったのは、DSP。準備期間の稽古の為、劇団の他のSurfaceに繋げてしまったので、アドレス等の設定が違ってしまったのか？！またはケーブルが怪しい。データーを入れ直したり、ついには初期化したり、色々試みるも、道は開けない。

あいにくの日曜日だったので、メーカーさんはお休みなので劇団のシステムに詳しい人に電話します。その人も休日だったので、大変ご迷惑をかけてしまいました。(2時間ぐらい電話していました、たぶん、ごめんなさい)

結局何が原因だったのかと言うと、サブミキサーの繋ぎの設定が違っていたことで、ネットワークがぐちゃぐちゃになってしまっていたのです。リダンダントであるべきが、デイジーチェーンに変更されていた・・・あーなんてこった。

いろいろやっていると、サブミキサーのみが、いつも悠然と表示されています。最初は「こいつだけは元気だな、よしよし、お前だけだよ」と好意をもってたんです。しかし、お前が犯人かー！！でも、設定は人間がしている

ので、機械は悪くありません、ごめんなさい。怒らないでね、機嫌よくこれからもよろしくお願いします。ツアーは5ヶ月くらい続きます。私は行かないけど、みんな元気で頑張ってるね。

今回のひじょーに危なかった経験をもとに、トラブル(それ以外でも)時は冷静に考え、機材1台1台を順番に確認していかなければいけません。そうすれば今回も、もっと早く解決していたかもしれません。焦っていたのと、思い込みがいけません。反省です。トラブルは怖いけど、勉強になるし、良い経験となりますよね。でもそんな経験はしなくても良いです。特に忙しい時は。

では今年の夏も猛暑らしいですね、ご自愛を。

(劇団四季音響部)

モスクワ芸術座の

来日公演

神奈川県・百合山 真人



去る5月28日～31日までかめありリリオホールにてロシア文化フェスティバル2024の一環で、モスクワ芸術座が来日し、『決闘』（作:アントン・チェーホフ）の公演が行われました。日本側の現地対応という役割で公演に携わったのですが、言わずと知れた現代演劇の基礎を作り上げたスタニスラフスキー・システムを作り上げたモスクワ芸術座ということもあり、学ぶことの多い実りのある日々でした。音響チームにも通訳さんを通して、音の意図などを質問できたので、それも含めて備忘録としてここに書き留めていきたいと思います。

モスクワ芸術座の方々が着ていたTシャツには、ある文字が刻み込まれていた。それは、表面に「信じられる」、裏面に「信じられない」という文字。これは、スタニスラフスキーが晩年車椅子生活になりながらも演出していた際によく俳優たちに言っていた言葉だということかと、舞台上に俳優の反応(怒りや悲しみ、失望などの感情)がそこで本当に湧き上がっていれば、「信じられる」となり、そうでなければ「信じられない」ということによ

うだ。舞台稽古で確認していたのは、久しぶりにやる演目だったこともあり、台詞の確認とは別に反応について細やかに確認していた。その台詞の言い回しだと、この作品にとって必要な反応ができない、ならば、どういう風に台詞をいうか、という繰り返しを演出家を交えディスカッションしていた。後々聞くとところによると、それぞれの俳優が作品に対する確固たる哲学を持っており、誇りを持って仕事をしていると聞いた。

物語の舞台となるコーカサス地方には、かつてアシュグと呼ばれる吟遊詩人がおり、諸国を旅し、ネックの長い弦楽器サズ(図1)を弾きながら詩を即興的に歌い上げていた



図1 サズ

という。その姿は、生命力溢れる力を持っており、その当時の人々の原風景とも言われている。

作品の中の音楽は、全てそのサズの演奏者が舞台上に出てきて奏でていた。途中の場面転換での音楽は、舞台上にはおらず、袖で演奏していた。物語の印象的な場面で何度も現れ、作品を彩っていた。マンドリンに似たその音色であるが、様々な演奏方法で、キリキリとした緊張感をもった音色や柔らかなさざ波のような音色とまさに様々な色彩であった。

また、サズの演奏者は、物語上では吟遊詩人であるが故に、この世界の目撃者であるが如く、客観性をもたせていたように思えた。現地の音響チームが、この楽器にアコースティックな響きを加えたいとのことで、QL1のリバーク成分のみをwallに少しこぼした設定としていた。

そこで、ふと一つのことを思った。木の家が中心の日本の響きと海外の石を中心とした響きは、生活の上で感じる響きがそもそも異なっているのではないか。サズの響きは、まさに適度な石の響きを持って、きちんとそこにいると信

じられる主体の一つとして存在していたように思えた。

音響効果に関してもいくつか触れていきたい。サズが生楽器ということもあり、その相乗効果を狙い、舞台袖でマイクに向かって音具にてリアルタイムに演奏するという形となっていた。

特に良かったのは遠雷の表現である。決闘に向かう前、主人公が心の葛藤を吐露する場面で、非常に効果的に使われていた。木に縄を括りつけた棒で、SM58に擦り付けたり、軽くポンポンしたりして、それにアコースティックな響きを持つリバーク成分を加えていた(図2)。EQはLOを持ち上げ、HIを落とす必要な音色のみのEQで、遠雷のゴロゴロが台詞の合間に絶妙なタイミングで入り込んでくる。音具の担当も音響チームの方のことだった。

また、小石が落ちる音の表現で、小さい豆のような

様々な形の石を板にパラパラ落とす音色も、遠雷とのコントラストもあり、何か人にとって大事なものがこぼれ落ちていくようにも感じ、効果的に使われていた(図3)。

音響チームにその意図を聞くと、やはりそこにあるもの、つまり信じられるものというニュアンスがあり、生楽器で効果音を表現しようとしたようだ。ロシアに歌舞伎のように生楽器の効果音の歴史があるのかと思ったが、それはなく、この公演のために13年ほど試行錯誤して積み重ねてきたものさそうだ。また、波の音も全編通じてあったのだが、後半の荒れた波とのコン

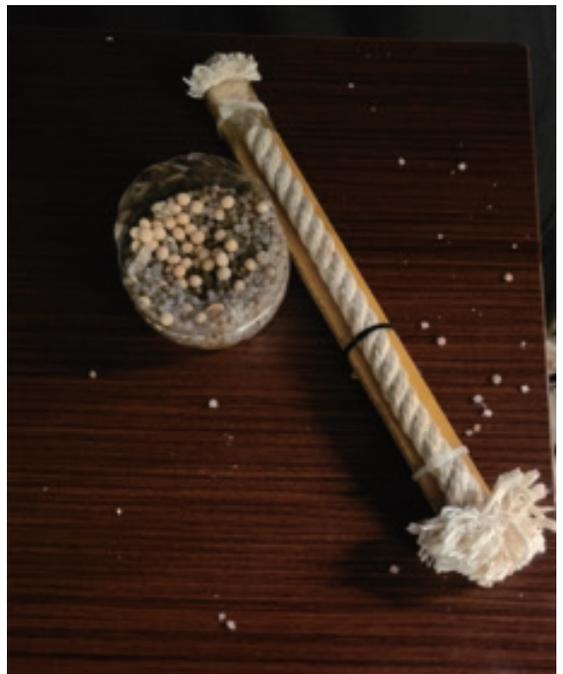


図2 遠雷の音具



図3 小石の音具

トラストで前半の優しい波を選んだとのことだった。

惜しむべきは銃声の音で、運搬の関係で火薬を持ち込み

と思った。

そして、最後にやはり触れておかないといけないことといえば、昨今のロシアによる

できなかったので、意図するものとは違っていただろうだった。これは、いつか本国で体感するしかない。

シンプルでいて、力強い作品に対する哲学。それこそが、この公演で学んだことであり、信じられる、信じられないという新たな基準が自分にもたらされたことも今後の作品作りに活かしていきたい

ウクライナ侵攻や歴史的には1917年のロシア革命、1991年のソ連崩壊など、その時代にとっての芸術というのを問い続けてきた経緯である。モスクワ芸術座のかつての演出家の一人が、こんな言葉を残していたという。「生活の真実
は葡萄であり、芸術の真実はワインである」。奇しくも1917年のロシア革命にて肅清され命を落としてしまったという。ただ、ロシアにおいての芸術文化に対する哲学が、その言葉を通して、異国の地である私の身体にも染み渡った。

この決闘という作品の中でも人の営みについて言及している。信仰や住む場所が異なれど、お互いの相互理解を持って、ワインを飲み合える世界となるよう切に願います。

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

(舞台音響家)